

# Practica 「知る」 Vol.2

Practica (プラクティカ) とは「実践」を意味するラテン語です

2017年1月



## こんな人に読んでほしい！

- \* 病院機能評価ご担当者様
- \* 現場で質改善活動を考える皆様

## こんな内容が載っています！

- \* 他病院の改善事例
- \* 改善にあたっての苦労や工夫

## こんなことを知ってほしい！

- \* 他病院の質改善に対する考え方  
や工夫など

## Practica 「知る」では…

病院機能評価の認定3年目を迎える病院の皆様から、**期中の確認**において報告いただいた「改善事例」を紹介します。病院機能評価の受審をきっかけに、自院の「弱み」を補い、「強み」をより強化するための取り組みなど、多数の事例を報告いただいております。

報告いただいた病院の種別や役割は様々ですが、具体的な事例には、皆様の病院でも実践できるヒントがあるかもしれません。ぜひ参考にしてください。

- ※ **Practica 「考える」**では、評価項目の考え方のヒントを紹介します。併せてご活用ください。
- ※ 本冊子の情報は、認定の判定基準を示すものではありません。
- ※ 一部表記を「病院機能評価 機能種別版評価項目<3rdG:Ver.1.1> 解説集」に則り、趣旨を損ねない範囲で改変させていただいております。

今回のテーマ 「医療の質」

## 「改善事例」とは何でしょう？

### 1. どうやって改善事例を報告するの？

期中の確認では、病院機能評価の認定3年目を迎えるすべての病院に、自己評価を実施しています。また、自己評価とは別に、認定期間中における質改善活動の活性化を目的として、院内の改善事例を任意で報告いただいています。

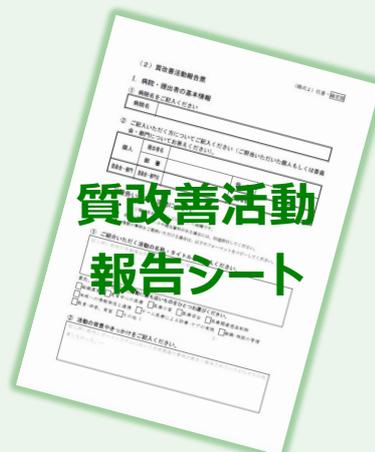
### 2. 報告する目的は？



- 認定期間中における医療の質改善活動の活性化を図るため
- 自院の取り組みを振り返り、文書化・可視化していただくため
- 自院の活動を外部に向けアピールする機会としていただくため  
さらに、全国の認定病院との情報交換の契機としていただくため

### 3. どんな内容を報告するの？

- 病院の概要、記入者（部門）の概要
- 活動の名称、タイトル
- 活動の背景、きっかけ
- 活動の内容や成果
- 今後の課題
- 苦労した点、工夫した点 …など



改善事例は、提出内容に応じて以下のカテゴリーのいずれかを選んでいただきます。

組織運営

医療安全

組織・施設の管理

患者中心の医療

医療関連感染制御

教育・研修

**医療の質**

地域への情報発信と連携

チーム医療による診療・ケアの実践

Practica「知る」Vol. 2では、「**医療の質**」をテーマとした改善事例を紹介します。

## 事例 1 : 看護診断立案までのアセスメント、計画についての看護記録の充実

### 【受審時の機能種別】

一般病院 2 (500床以上)

### 【提出部署/委員会】

看護部記録委員会

### 【活動の背景・きっかけ】

精神面、社会的側面の情報、アセスメント、支援についてカルテに記載されていなかった

### 【活動の内容・成果】

入院時の「患者プロフィール記入シート」に、得られた情報から、アセスメント、看護計画が導き出せるよう、情報をカテゴリー化し、「情報から考えられる看護診断」を追加した。

入院時の定型文を作成し、全看護師に周知した。平成 26 年 1 月に定型文を使用し、記入されているかを監査、平成 26 年 10 月に質的監査を含め調査した。

形式的に記入されているものは、1 月には 51%であったが、10 月には 100%であった。

### 【工夫・アピールポイント】

必要な情報を収集し、そこからのアセスメントについて記録ができるよう、プロフィールシートや定型文を考案した。

### 【今後の課題】

アセスメントと計画が合っていないなど、質的な面で不十分な点もあり、病棟での定期的なカンファレンスの場を増やすなど、検討していく必要がある。

(提出月：2015年5月)

## 事例 2 : 神経筋疾患の呼吸リハビリテーション

### 【受審時の機能種別】

リハビリテーション病院 (200床以上)

### 【提出部署/委員会】

病院機能評価委員会

### 【活動の背景・きっかけ】

- (1) 筋神経疾患の呼吸リハビリテーションを先進的に行っている病院での研修後、当院でも充実させ質向上を図る必要性があった
- (2) 呼吸器管理患者の増加に伴うチーム医療・ケアの質向上
- (3) 医療機器・医療材料管理の必要性が高くなった

### 【活動の内容・成果】

神経筋疾患・脊髄損傷の呼吸リハビリテーションガイドライン（2014年6月金原出版、監修：日本リハビリテーション医学会）に基づき、肺コンプライアンスの維持、舌咽呼吸、肺拡張、気道クリアランス向上等の呼吸リハビリテーション介入の質向上を図っている。

### 【工夫・アピールポイント】

- (1) 呼吸リハビリテーションの充実
  - ① IPVの導入、カフアシストの導入
  - ② リハビリテーションスタッフによる喀痰吸引
  - ③ リハビリテーションスタッフによる救急蘇生バック操作講習
- (2) 人工呼吸器台数増加に伴う対策
  - ① チームケアの質向上
  - ② リハビリテーションスタッフの食事介助参入
  - ③ 病棟カンファレンスの充実
  - ④ 人工呼吸器ケア統一カードの工夫と導入
  - ⑤ 入浴用人工呼吸器パラパック導入
- (3) 職員教育
  - ① 先進病院との連携  
職員の知識・技術・モチベーション等の向上を目的に、筋ジストロフィー症患者の専門病院から医師や看護師、療法士を招聘し、臨床指導や教育講演、意見交換等を継続して行っている。また、当方から先方へ多職種の職員を長期派遣し、研修を受けている。
  - ② 臨床研究  
臨床研究を推奨し、学会発表等を積極的に行っている。

### 【今後の課題】

- (1) 個々の患者に応じた最善の呼吸リハビリテーションの介入
- (2) 新しいテクノロジーの積極的な導入
- (3) 職員教育、研修システムの充実
- (4) 専門医の確保

(提出月：2015年5月)

## 事例 3 : 輸液に関わる知識・環境を向上し、患者さんに安全で正確な輸液を提供しよう

### 【受審時の機能種別】

一般病院 2 (200床～499床)

### 【提出部署／委員会】

臨床工学科

### 【活動の背景・きっかけ】

私たち臨床工学科では、患者の治療を円滑に行うために医療機器が常に正常な動作をするよう保守管理に努めています。当院で最も多い医療機器は輸液ポンプで、さまざまな輸液治療に使用されていますが、滴下制御の輸液ポンプでは薬剤の性状により流量誤差が多く出てしまうものがあります。過去には薬剤の性状により、終了予定時刻と6時間の誤差が生じたという事例もありました。これでは患者の治療に支障をきたし、大きな影響を与えると共に、現場スタッフへのストレスにもなり病院の不利益につながります。そこで、臨床工学技士・医師・看護師・薬剤師・総務で組織横断的なTQM活動チーム『世紀末輸液救世主伝説 点シロウ』を結成し、『輸液の件 (拳) ～点滴 (天敵) よ！お前はすでに済んでいる～』をテーマに掲げ、輸液ポンプを使用した場合の不具合を調査し、輸液治療の質向上に取り組むことにしました。

### 【活動の内容・成果】

まず現状調査を内科系・外科系の全2病棟で1週間実施、調査期間中に2病棟で施注された輸液件数は621件あり、流量調整やアラームが頻回に発生したという問題発生件数は135件(21.7%)と実に5件に1件以上何らかのトラブルが発生していた。特に、『患者さんよりアラームがうるさいから何とかして欲しいという訴え』が48件(35.6%)と『終了時刻になっても予定通り施注されなかった』が42件(31.1%)と非常に多く、異常件数全体の約三分の二を占めている状況であった。輸液施行中の患者さんは『時間予定通りに入ること』や『輸液が早く終了して欲しい』と思うことではなく、警報発生による不安や不快感を気にかけていることが受け取れた。

トラブル減少目標を50%減とし、対策として以下の5項目の活動を実施した。

- (1) 滴下数制御ではなく回転数制御の輸液ポンプと輸液セットを導入し、薬液の性状の影響を受けずポンプ自体の精度を上げることで正確な輸液を施行する。

- (2) 輸液に関する知識向上の為、輸液ポンプの使用説明だけでなく、薬剤師に協力依頼し、薬液の特性に関しての内容も盛り込んだ勉強会を開催した。
- (3) 輸液時の説明を漏れなく行なうため、輸液実施時の患者説明内容の統一を目的に、フォーマットを作成した。
- (4) 強制圧をかける輸液ポンプを使用できない化学療法の注入誤差の発生を予防するため、当院使用薬剤毎の補正表の作成を行った。
- (5) 化学療法時の患者の安全を第一に考えたポンプ使用をするため、化学療法の薬液に合わせたドリッパー（滴下制御装置）適正使用のルールを院内決定事項として化学療法委員会を通じて院内全体に周知した。

成果の確認は、現状調査と同じ条件で調査を実施した。患者からの訴え48件が0件となり、予定通りの時間に施注が行えなかった42件が14件。トータルの問題発生件数でも135件が14件に減少、90%近い改善数となった。

#### 【工夫・アピールポイント】

当院では、専門家の指導を受け、毎年各部門がTQM活動として組織横断的な質の改善活動を実施し、年度末にはその成果を発表しています。

今回も、我々臨床工学技士の輸液精度を上げる対策にとどまらず、医師は化学療法のルールの設定、看護師は患者説明と現状調査、薬剤師は薬液の性状調査、総務は輸液セットや輸液ポンプなどの医療材料や医療機器のコストダウンに、すべての職員が『輸液治療の質向上』という一つのテーマに協力し合い、各々の得意分野で力を発揮したことで達成できた活動だったと考えています。

#### 【今後の課題】

対策実施時の回転数制御対応の輸液セットはデモであったため、現在本格切替えに移行中です。輸液セットの切り替えが完了したら輸液ポンプを回転数制御へと切り替えていきます。化学療



法補正表の記載内容を充実させ、精度の高い輸液管理を目指します。

これまでの対策には予想を超える成果が得られましたが、対策をやりっぱなしでは意味がありません。成果の定着度合いの確認と、さらなる定着化を今年度実施していきます。

(提出月：2015年5月)

## 事例 4 : 電子カルテの導入による医療の質改善および安全性確保

### 【受審時の機能種別】

リハビリテーション病院（200床以上）

### 【提出部署／委員会】

病院機能評価委員会

### 【活動の背景・きっかけ】

チーム医療を推進するための情報共有と業務の効率化を図る。

### 【活動の内容・成果】

＜電子カルテの導入による医療の質改善＞

平成26年2月に稼働を開始し、患者情報、診療情報、看護、リハビリテーション、医事、その他の多くの情報共有が図られ、チーム医療の質改善と患者の安全性確保、業務の効率化が進められている。

### 【工夫・アピールポイント】

当センターおよびグループ施設において、同システムを導入し、事業所間および院内の患者診療等の情報共有と医療安全の向上が図られ、質向上と業務の効率が改善された。

### 【今後の課題】

- （1）電子カルテが蓄積するデータの有効活用
- （2）電子カルテの精度向上

（提出月：2015年5月）

## 事例 5 : ニューロリハビリテーションへの挑戦

### 【受審時の機能種別】

リハビリテーション病院（200床以上）

### 【提出部署／委員会】

病院機能評価委員会

### 【活動の背景・きっかけ】

最新のリハビリテーション知識や技術を導入し、上下肢の機能改善および生活期リハビリテーション医療の質向上を図る。

### 【活動の内容・成果】

#### (1) ボツリヌス療法の実施

ボツリヌス療法は平成26年4月から平成27年4月現在までに延べ88件施行した。

#### (2) TMS治療（反復経頭蓋磁気刺激）の導入

TMS治療は平成27年3月に機器を導入し、脳卒中後の上肢麻痺改善を目標に16患者（延べ35回）実施した。

#### (3) ロボットスーツ訓練の実施

ロボットスーツHAL®福祉用 単関節HAL（H27年5月22日～）  
脊髄損傷対麻痺患者や脳卒中片麻痺患者等に実施している。

### 【工夫・アピールポイント】

#### (1) 専門チームの立ち上げ

多職種による専門スタッフチームを発足させ、入院クリティカルパスを作成するとともに、患者への説明と同意、アウトカム評価、学会発表等を行い医療の質改善を図りつつある。その他、近隣医療機関や地域住民に対し、広報紙、講演会、連携会議等で紹介している。

#### (2) 臨床研究を推奨し、学会発表等を積極的に行っている。

### 【今後の課題】

#### (1) リハビリテーション専門医の継続的確保

#### (2) それぞれの効果の検証

#### (3) 新しいリハビリテーション機器の導入

（提出月：2015年5月）

## 次号のPracticaは…

Practica「知る」Vol.3 では、「医療安全」をテーマに改善事例を紹介します。

## **ご意見・ご要望はこちら**

今後取り上げてほしいテーマなど、ご意見をお聞かせください。また、本冊子に関するご意見・ご要望、病院機能評価事業に関するご意見もお気軽にお寄せください。



E-mail : [jushin@jcqhc.or.jp](mailto:jushin@jcqhc.or.jp)

## Practica「知る」 Vol.2

編集：評価事業推進部 久米・伊東

発行：公益財団法人日本医療機能評価機構 評価事業推進部

〒101-0061 東京都千代田区三崎町1-4-17 東洋ビル

TEL : 03-5217-2326 FAX : 03-5217-2331

<https://www.jq-hyouka.jcqh.or.jp/>



公益財団法人 日本医療機能評価機構  
Japan Council for Quality Health Care